

浄

monthly
JŌDO

土



1999

10

October





テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



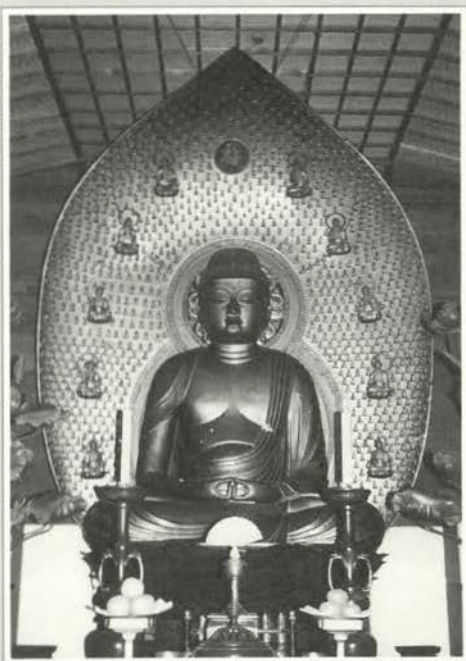
0088-82 (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

丈六阿彌陀如來像（吉田寺本尊）



淨土十月

文・写真／真山 剛

寺院紀行

奈良

吉田寺

きちでんじ



清水山吉田寺の堂内。収蔵庫に修めた本尊まで、奥行きある本堂

昭和四十七年、故有吉佐和子の『恍惚の人』が出版された。ボケ老人を取り上げたこの作品はベストセラーとなった。

あれから二十七年、日本の高齢化は確実に進み、今や社会の対応はもちろん、どう歳をとりどのように人生を締めくくるかという個人の意識が見直されている。

「お年寄りに自立が求められる時代になりました。そのためには健康でなくてはいけない。健康で長生き、これが理想ですが、なかなか難しい」

吉田寺第三十世山中長悦前住職は言う。そして第三十一世山中眞悦住職がこう続ける。

「健やかな身体に安らかな心。幸せな老後にはこうした内的条件にさらに家族や親戚といった外的条件もそろえてはいけません、これもなかなか難しいことです」

ベストセラーとなった『恍惚の人』はこの寺に大きな変化をもたらせた。それまでもボツクリ寺として知る人のみ知る地域のお寺が、マスコミに取り上げられ、にわかに世間の注目を浴びたのである。

「ボケて回りに迷惑をかけることなく、元気でそして最後はボツクリ往生したい」そんな誰にでもある願いに多くの人々が全国から訪れた。参拝者は日々、早朝から夜まで続いた。当時、高知大学で



吉田寺本堂。現在は参拝者は臨から入堂している

西洋哲学を学んでいた現住職はその頃をこう思い出す。

「休みに帰山する度に参拝者が多くなっている。それまで檀家もなく地域の人たちと一部の信者の方たちのお寺だったのが、それこそ一夜にして様変わりしたわけです」

もともと吉田寺は環境には恵まれている。すぐ近くには名刹、法隆寺がある。古都観光のついでに、あるいは吉田寺に参拝の後に観光も楽しめる。吉田寺の人氣はうなぎ登りとなった。

昭和五十五年がピークと前住職は振り返るが、当時のこんなエピソードがある。

ポックリ寺こと吉田寺の参拝を目玉にしたツアーのバスが渋滞に巻き込まれた。予定の時間を大幅に過ぎたが、何せ吉田寺をお参りしないわけにはツアーの意味がない。夜中近くに到着した参拝客への読経が暗闇に響き渡ったという。

またこの寺の功德を聞き、わざわざ海外から訪れた外人さんもある。数は多くないものの急いで英語のパンフレットを作ったという。生老病死は釈迦が説かれた真理だが、やはり老いと病、そして死への関心は世界共通である。

シモの世話をかけずにポックリ往生できる。寝たきりになり娘や嫁の手を煩わせたくない。この思いが無くなることはない。恍惚の人ブームは去っても、お参りの人は後を絶たない。

JR法隆寺駅



法隆寺金堂。吉田寺から法隆寺は徒歩約二十分

現在は当時と違い、村あげてとか、地域の団体での参拝がめつきり減り、個人での参拝が中心になったというが、それでも土日には数十人のお参りがある。また年に一度九月一日の放生会には五百人もの人が集まる。これは日常的にお参りがあるのでこの数で済んでいるが、昔、ブーム以前は数千人が集まったという。

今は観光ガイドにも、奈良の大寺の間に挟まれるようにしてだが、それでも必ず吉田寺の紹介記事は載っている。

参拝者の多くは自分の肌着を持参し、シモの世話をかけないよう祈禱してもらう。お参りの八割は女性で、やはりお年寄りが多い。

安らかに亡くなった母の身の回りを整理したら、ここのお守りが出てきた。自分もあやかりたいとその娘さんが参拝に来る。あるいは昔主人の母を連れてきたことがあって、という嫁が来る。また昨今は老夫婦一緒のお参りが多くなったという。

お参りに来られるのは実はまだまだ元気な証拠であるのだが、実際に寝たきりの父母のためにお参りする方もいる。現代社会の抱える難問の一つである高齢化問題や家族問題の生々しい現実がこのお寺にはある。

そうした現実を参拝者との会話の中で見続ける吉田寺の住職は、いわばお年寄りの良きアドバイザーである。

それまでは、檀家もなく法隆寺にお手伝いに行っていた先代住職。



本堂脇の入り口に並ぶお守りの数々。
絵はがきも加わった

裏手にある恵心僧都の墓



吉田寺開祖、恵心僧都の木像と位牌



吉田寺第三十世山中長悦前住職（右）
と第三十一世山中眞悦住職

学校卒業後、お寺に入る前に一度就職をしようと思っていた現住職。お二人の生活や予定は一冊の本で大きく変わったのである。

さて、ここで吉田寺がなぜボックリ寺といわれるのか、その理由を探ってみよう。

吉田寺の創建は古く永延元（九八七）年。天智天皇の勅願によるといわれ、開基は『往生要集』で世間に地獄の模様を知らしめた念仏の祖、恵心僧都源信である。ボックリの由来となる逸話はその恵心僧都の幼少の頃から始まる。

ある日大和の二条山ふもとの河原で千菊丸（恵心僧都の幼名）が遊んでいた。そこに優秀な僧侶になる子供を探しに来ていた比叡山の旅僧が通りかかった。一から十までで「つの字」がないのは十（とお）だけ、「つの字」が二つは五（いつつ）だけ。と歌っていたその幼子の着眼の鋭さと利発さに、旅僧は山へ登らせてはその母に申し出た。

しかし「この子は亡き夫の忘れ形見。男ではあるが大きくなれば私の世話もしてくれよう。どうして女人禁制の比叡のお山に登らせましょう」と断った。が、旅僧の執拗な説得にわが子のためと心を変える。

やがて月日が過ぎ、立派な僧侶となって恵心僧都は御八講に召され、終わったあとで、たくさんの褒美を賜った。その褒美を母に差



正面入り口の石碑

し出すが、母は「僧侶にしたのは褒美のためではない。私の後生を救ってもらうためだ」と褒美には目もくれず、こう言った。「告げざらん限りは来るべからず」

こうして何年か過ぎたある日、なにか急に母のことが心配になった僧都は急いで山をおりて大和に向かう。その道すがら休みをとったのが、一面田んぼの中の高台ながら、清水が湧き竹林や雑木林となっている清水の森だ。とその雑木林の中、一本の栗の木が光を放っている。良く見ると阿弥陀さまの姿が浮かんでいる。そこで母の具合が急に悪くなりお戻り下さいという伝言を携えた使者に出会う。急いで戻った恵心僧都が除魔の祈禱をした浄衣を着せてあげると、苦しみが消え念仏の中で母が安らかに往生した。その母の菩提を弔うため、末世の人々の臨終の苦しみを救うため、清水の森に生えていた栗の木の阿弥陀さまを念仏の中、一刀三礼のもと現れたのが吉田寺の本尊、丈六の阿弥陀如来像である。

以来、この本尊の前で念仏を称え祈禱をうけると、長く病み患うことも、腰・シモ・スソの世話になることもなく、延年天寿を保ち最後臨終の時にも痛み苦しむことなく安らかに阿弥陀さまに迎えられる、極楽往生できると信仰されてきたのである。

この吉田寺の信仰を支えて来た阿弥陀如来像と奈良では珍しい多宝塔は重要文化財に指定されている。

吉田寺は田んぼの中にある鬱蒼とした林にある



また、吉田寺の歴史で見逃せないのは法隆寺とのつながりである。法隆寺は法相宗から現在は聖徳宗となっているが、観光寺院ではあるがその本来の役割は学問寺である。その学問の中心である勸学院の僧侶がちよつとくつろぎに来るのが、この吉田寺だったのである。吉田寺は創建当時は特に何宗ということもなく、宗派を問わずいろいろな方がお参りしていた。近くには融通念仏宗のお寺が多いが、江戸時代の前半に吉田寺は浄土宗となった。

そんな吉田寺が近くの法隆寺の学僧のサロンの役割をしていたというのは興味深い。現在はつつい宗派に目がいきがちだが、昔はもっと大らかだったようだ。

こうしてポツクリ往生の寺としてマスコミで紹介されたり、もてはやされているが、先代住職や現住職の想いは往生だけにはとどまらない。

昨年十月の現住職の普山式（住職就任式）を報じている吉田寺の寺報『白蓮』の一文にその想いが語られている。「人生の旅」と題された老い、病とつきあうという項目の最後の部分である。

「『前略』私たちの日常生活も「老いを楽しむ」「老いを味わう」「老いを喜ぶ」としたい。老いと戦い、老いを悲しむ、老いをなげく毎日をやめにして明るい日々が送れますように、感謝をこめて南無阿弥陀佛をおとなえください」



本尊と並び重要文化財の多宝塔。大日如来が祀つてある

ちようにど取材で訪れた時、愛知県からきた母娘の親子の御祈禱の最中だった。端座してご一緒させていただいたが、御祈禱の後の住職の話は明解で説得力ある内容だった。

「今は横のつながりが稀薄になってきています。地域や団体でのまとまりから個々の時代になってきたようです。ですから、吉田寺でもお参りに来て下さる皆さんの一人ひとりを大切にするように心掛けています。

ポツクリ往生のためにも平生のお念仏を大事にして下さい。回りの環境が整ってもご自身の心が落ち着かなければ、車の両輪がそろわない。今を大切にしてこそ往生が待っていてくれるのですよ」

こう力強く語る住職はそれこそ今日も全国からの参拝者一人ひとりに想いを伝えているに違いない。

(ルポライター)

天智天皇の妹の御陵跡が本堂の横手に残っている

吉田寺の大法要放生会で魚が放たれる放生池



浄土

1999/10月号 目次

寺院紀行「奈良・吉田寺」	真山 剛	4
目次		13
日本史上の法然上人（三）	大隅和雄	14
連載小説 法然上人をめぐる人々（六）	石丸晶子	20
表紙の言葉	三浦功大	27
御法語に聞く	林田康順	28
東海道五十三次を歩いて（六）	原田 功	32
J フォーラム		41
CD評		42
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	50
編集後記		50



表紙題字＝浄土門主 中村康隆 猊下
表紙撮影＝三浦功大
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

日本史
上の
法然上人
(三)

大隅和雄

最終回

前回までに、近代の日本史学が成立するまで、鎌倉時代に仏教の新宗派が続々と誕生したことを、日本における「宗教改革」と呼び、それを日本史上屈指の重要事項と考えるようになったということを説明して来ました。法然上人は、年代から見ても、その思想から考えても、鎌倉新仏教誕生の先頭に立つ人物であると考えられたわけです。

宗教改革の中で生まれた鎌倉新仏教は、平安時代の仏教が貴族のための仏教であったのに対して、庶民の仏教であったと考えられました。そこで、仏教史の研究者たちは、平安時代の仏教の動向の中に、庶民仏教につながるものがあつたことを明らかにし、鎌倉新仏教誕生の背景の歴史をとらえようとしました。そうした中で注目されるようになったのが、貴族社会に密接につながりを持つ大寺院の外で、宗教的な活動をしていた「聖」（ひじり）たちでした。

聖は「ヒジリの君」というように、神としての天皇をいうことばでしたし、徳の高い僧を尊敬することばとしても用いられていました。平安時代の半ば頃から、大寺院の外で活動する宗教者を聖というようになりました。大寺院の外で活動すれば当然、庶民に接することになります。大寺院の中では、権勢や名声を競って争いが絶えないことに失望して、外へ出てしまった聖がいましたし、正規の手続きを経ないで僧の姿になり、宗教活動に加わっていた聖も少なくありませんでした。また、民間で活動していた行者などが、聖と呼ばれることもありました。

平安時代の半ばになると、そういう聖たちが、貴族たちの関心を引くようになり、聖のことを書き留める人が現れるようになりました。阿弥陀如来の慈悲を信じて、極楽往生を願った人々のことを書いた数々の往生伝、法華経信仰の行者の行動を伝える書物などが編纂されましたが、その中に沢山の聖が登場し、同じ頃からさかんに作られるようになった

説話集にも多くの聖が現れ、絵巻物の中にも聖の姿が見られます。平安時代の後半から鎌倉時代には、庶民の間で活動する聖が沢山いたことがわかるわけです。

そこで、庶民仏教の歴史を明らかにしようとした研究者たちは、聖の動向を追跡することになりました。聖について記述した文章を集めて整理してみると、初期の聖の中には呪術的な活動をする者が多く、時代が下るにつれて、聖の信仰が阿弥陀信仰と法華経信仰にまとまって行き、雑多な呪術の世界から、宗教の世界へと純化して行くことがわかって論じられるようになったのです。

そして、聖の研究が進む中で、平安時代後期の聖たちの間には、法華経を特別の經典として尊重する人々と、極楽往生を願うことを勧める人々という二つの流れが生まれ、前者を受け継いで日蓮が現れ、後者の流れの中から法然が出て、さらに俗人に近い生活の中で念仏を称え続けようとした人々の信仰を受けついだのが親鸞なのだと説明されました。鎌倉新仏教の源流は、平安時代の民間の仏教の中に見出され、そうしたことから考えると、新仏教は庶民仏教なのだというわけです。

しかし、鎌倉新仏教成立の背景は、もう少し複雑で、幅広い歴史の中で考えてみなければならぬと思います。大寺院の外で沢山の聖が活動していたことは確かだと思われませんが、その聖のことを書き記したのは聖自身ではなく、貴族社会の中にいた文人貴族、知識人貴族ともいえるべき人々でした。聖が自分のことを書いて、世間の人々に聖の存在を知らせ、聖の活動を後世に伝えようとしたわけではありません。それでは、文筆に長じた貴族たちは、どんな関心を持って、何のために聖についての情報を集め、文章にまとめ、往生伝や説話集を編纂したのでしょうか。

聖に関する早い時期の記述は、国史の中に見出されます。国家の歴史を編述する貴族た

ちは、国家の制度と秩序を重んじていましたから、当然のこととして、大寺院の外で活動する聖に対しては否定的な見方をしていました。仏教の正統な学問や儀式は大寺院の中にあり、大寺院の外に出た聖は、怪しげなまじないや祈禱で人々を惑わす者だと考えていましたから、聖は矯正すべき対象であり、体制の中に戻ってやることを求めたわけです。

ところが、平安時代も後期に入ると、文筆に携わる貴族の中には、社会の制度のあり方や、秩序に疑問を抱く人々が多くなりましたから、体制の外で活動し、庶民に仏教を広めようとしている聖に強い関心を持つようになりました。聖を否定的な目で見なくなった貴族たちは、聖についてのさまざまな情報を集め、聖がどういう活動をしているのかを記述しようと思いました。聖は、社会のあり方に疑問を持つようになった貴族たちの、関心の的になったと考えられるわけです。

そして、貴族社会の行きづまりが覆うべくもなくなり、行く末に不安を感じるような貴族が多くなってくると、体制の外に出ている聖は、願わしい生き方を体現している人物のように思われたり、自分自身は世間の外に出ることに踏み切れない貴族たちにとって、憧れの対象として記述されたりするようになりました。

こう考えてくると、はじめに呪術的な世界に低迷していた聖たちが、時とともに信仰を純化させて、念仏や法華の行者になって行き、法然や日蓮につながるといえるのは、それを伝えている筆者、つまり聖のことを書いた人々の信仰や思想の変化を示しているのであって、民間の宗教者であった聖の変化が読み取れるという解釈だけでは、不十分であるように思えてきます。

国史の編者は、聖を否定的な目で見て、矯正の対象と考えていたわけですが、文人貴族たちは、聖に好奇の目を向けて、文筆活動の素材にし、さらに貴族社会の解体が進むと、

聖は憧れの対象から理想像にさえなつて行くわけです。

従つて、平安時代の半ば以降の聖の記述の変遷が、法然・親鸞・日蓮へとつながつていくという読み取りができるのであれば、それは聖そのものの変化というより、聖についての記述を積み重ねてきた、文人貴族たちの信仰の変化をあらわしているものであり、文筆に携わる人々の信仰が念仏と法華に収斂して行き、さらに純化して行つたと解釈すべきものではないかと思うのです。聖の変化は、民間の仏教の変化というより、聖のことを記述した人たちの考え方の変化なのだという読み取りができるとすれば、鎌倉新仏教が、文筆に携わつていた貴族たちの信仰の行き着くところであつたということも考える必要があるわけですね。

そこで、少し視野を拡げて、貴族社会の知的な活動について考えたいと思います。日本の貴族社会は、中国の制度文物を取り入れることによつて形作られました。中国文化は日本人から見れば外来文化ですから、あるべきたてまえを示すものとして受け入れられました。貴族たちはあるべきものを明確に示す中国の制度文物を尊重する一方、日本人の生活に根ざすものをほんねとして持ち続けていました。

平安時代の半ばになつて、かな文字が広まると、貴族社会ではあるべきたてまえを論述する場合には漢文が用いられ、私的な心情を伝える時にはかな文字を使うという使い分けが始まりました。公的なたてまえの世界につながる漢文に対して、私的なほんねを書き綴る和文は、やがて、あるがままの人間をとらえ、描き出す文学の発達を促し、人間の内面を見つめた作品を生み出すことで、あるべきものと考えられていた公的なことが、たてまえに過ぎないということの人々に知らせて行きました。

ところで、こうした動きは、仏教についても見られます。仏菩薩を、人間の理想的なち

り方を道成したものと考え、学問を重ねて仏について知り、修行を続けて一步一步仏に近づいて行くのが仏道であるという考え方は、人間のあるべき姿を求め続けていることになります。それに対して、あるがままの人間を見つめて行くと、もともと人間は罪障にまわりつかれた存在であり、罪穢れと無縁に生きて行くことはできないと考えざるを得なくなります。そして、そもそも人間に、仏になる可能性があるのだろうかという疑問が浮かび上ってきて、仏は人間の理想であり、学問修行によって近づくことのできる目標なのだという考えは消えてしまい、仏は遠い世界から人間を救う存在なのだという思いに達するわけです。

お釈迦様の時代に、直接教えを受けた人間ならばともかく、末法の時代の辺境の日本に生きている人間が、努力して一步一步仏に近づいて行くと考えることはとてもない思ひ上りで、それは自分自身を見つめ、内実を見据えることを忘れていくということになります。

そう考えてくると、平安時代後半の文学の動きと、仏教の中に見られる新しい動向とは並行して進んでいたわけで、あるがままの人間の弱さ、たよりなさを描き出そうとした文学の課題が仏教の中に引き取られ、あるがままの人間が抱えている矛盾、不確かで不徹底なそのあり方は、一体何に由来するのか、あるがままの人間を見つめた上で、人間とは一体何なのかを考えなおし、その人間と仏との関係を追究して行こうという思想の問題に組み換えて行ったのが鎌倉新仏教だったのだと思うわけです。

いうまでもなく、法然上人は、あるがままの人間を見据えて、その救いを求め続けて鎌倉新仏教の流れを切り拓いた思想家、宗教家であったと思います。

「書きおろし連載小説」

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々
式子内親王の生涯

第六回 女院と法親王、式子を見舞う

十三

「法然さまはわたくしに、身分の貴賤や貧富の別なく、み仏の前にはすべて衆生であり、人はみな、罪を犯さずにはすまぬ凡夫であることをお教えになったのです。それは日頃、わたくしが感じていたことでもございました。そして」

式子がまだ話し終わらないうちに、思わず、亮子はそれをさえぎった。

「まあ、それではあなたは、その教えに同調しておられるのですか。父君はつねづね、前世にあって功德を積んでいたゆえに、今、こうして現世では天皇・上皇の位についたのだ、と仰せであつたではありませんか」

おっとりした日頃に似ず、そう、鋭い口調でいうと、つづけて、

「父君は現世でも御信心深くあらせられ、御出家も遂げさせられたゆえに、来世においても一の位（いちのゐ）の人に生まれ変わるのには間違いなし、

といつも仰せになっていたのです。『梁塵秘抄』をお出しになったときも、その御口伝（ごくでん）のなかで、罪深い遊女のたぐいすら、一心に念仏すれば往生する、であれば、まして朕（われ）らが往生しない筈はない、とおっしゃっていることを、和歌を詠むあなたならば、よくござんじでしように」

亮子は数多い御白河の皇女のなかでも、特にこの父から愛された内親王であつた。

当時の貴族たちの生活形態を公家（け）たちの日記などから推察すると、天皇・上皇といった人々なども、内裏や御所にじっとしているとすることがない。

陰陽道の影響をうけて、方違いだ、気晴らしだ、といったは親しい貴族の邸宅を転々としたり、また手ごろな邸の譲与や貸与をうけては、それらの邸を渡り歩いて生活しているのだ。

そしてそんなとき、後白河はしばしば、長女の亮子を伴つたのである。

つまり、亮子は父と同居し、父と暮らした歳月がもつとも多い皇女であり、それだけに父に対する愛情も深く、今、式子がいったこととは、亡き父に対する冒瀆とも感じられたのであった。

そしてこの気持ち、穏やかで美しい顔立ちの亮子を、いつになく雄弁にしていた。

彼女はさらに言い募って、

「身分の貴賤や貧富の別なく、すべて凡夫・衆生であるならば、前世で積んだ功德はどうなっているのです。今、現世で積んでいる功德も何なのであろう。あなたは、父君と罪深い遊女のたぐいが、み仏には同じものに映ると言いなのであろうか」

「女院、齋院はそう言っておられるのではありますまい」

守覚は横に坐している亮子に視線をむけ、姉をたしなめるようにそういうと、

「たしかに、法然房はわれらみな、み仏の前には凡夫であると説いています。御房自身は、

叡山の頃からすぐれた学徳をたたえられた御僧であります、新しい法門に回心えしんしてから、凡夫の法然房、十悪の法然房、とみずからを申しているとか」

十四

しかし、亮子は守覚のことばも耳に入らない様子で、しきりに小さく首を左右にふりながら式子に、

「父君が御在世であれば、今の齋院をどんなにお悲しみになろう。あなたは御出家の戒師にも、無位無官の法然房を依頼して、父君のお怒りをうけたではありませんか」

「しかし女院」

守覚は、いつ果てるともしれぬ亮子の嘆息には頓着しないで、

「考えてみると、法然房のいう通り、われらはみな、み仏の前には罪深い衆生ともいえませぬか。先頃の源平の争乱をごらんください。権勢を誇った平家一門は西海に滅び、われら

が真言の秘法をつくして御誕生あそばした安徳幼帝は海に沈まりました。そしてその後は、争乱に勝った鎌倉がはじめた、身内同士の殺しあいじゃ」

「……」守覚がそこまで言ったとき、ようやく亮子は、ハッと守覚のことが耳に入ったようすで、無言のままたじろいだ。

「保元・平治の乱といい、源平の争乱といい、われらはこの年ごろ、餓鬼、修羅の巷になった人の世をみてきました。念仏一念にすぎること、を説く法然房は、人間凝視がそれだけ深いのです」

やがて守覚は、なかば独りごとのように呟いた。

「公卿・殿上人が何であろう。大将・士卒に何の違いがあろう。この末法の世は、人がすべて救いがたく、み仏の慈悲にすがらねばならぬことを教えました。」

この守覚のことに、式子はそれまで閉じていた目をひらくと、

「そうです、守覚さん。乱世のさまを眺めて、わたくしもそれを感じていたのです。そしてそんなとき、法然さまに出会いました」

生気のないよみがえった目が、守覚をみつめている。つづけて式子は、

「あの頃、わたくしは末法の世に生きて、苦しんでいました。討ち死にされた以仁も、海に沈まれた幼い帝も、近い身内ではありませんか。そして滅びた平家一門のなかには、わたくしたちに親しい人たちがいます。この人たちは、一体、前世にどんな悪業をしたといつて、今、現世でこんな目にあわなければならぬのでしょうか」

式子の唇がかわいているのをみて、足許にひかえていた大納言局が枕許ににじりよると、薬湯を口にふくませた。

亮子も守覚も無言のまま、式子の次のことばを待っている。

やがて式子は、

「道を求めていたのです、わたくしは。そし

て法然さまはそのわたくしに、弥陀の御本願と、一切衆生、必得往生の事をお教えくださいました」

「お疲れになりませぬか。しかし——」守覚は式子を疲れさせることを気づかつて言い淀んだ。

だが、

「お話したいのです。わたくしの心を姉上や守覚さんに聞いていただきたいのです」

姉と弟を見あげて式子がいった。

十五

「わたくしは今、自分一人の事にかまけているのかもしれませんが。いいえ、かまけているのでしよう。けれどもはじめてお会いしたその日、わたくしは法然さまに万々心をお打ち明けして、不安にとざされている心聞いていただいたあと、一つのことをお約束しました」

「——何です、それは」小さく呟くような声

で亮子が訊ねた。

「弥陀の御本願のつばさに乗って、浄土にいったあとは、一刻も早くふたたび現世にもどって来て、往生でえた悟りによって、現世の人々を浄土に導こうと」

そして式子はつけ加えた。

「国家と天皇家のために、み仏の加護を求めようとの約束はしませんでした。けれども法然さまは、人はみな衆生であり、十方世界のすべての衆生の必得往生に、一緒に努力しよう、とおっしゃったのです」

黙したままうなづいている守覚をみて、亮子がいった。

「まあ、それでは御室も、齋院が法然房の教えに帰依して、それでよしとされるのですか。先程、内親王には内親王の道がある、とおっしゃったではありませんか」

頭のなかで混乱してきたようすで亮子が訊ねた。

「いや、いや、そうではありません」

守覚は一つ咳ばらいをすると、

「わたくしが申し上げたいのは、齋院が一度は法然房の教えに帰依しながら、先程のお話では、お病篤い今、帰依するものを失って心が闇の中だという、そのお心です。齋院が今も心底、浄土門に帰依して、一切衆生・必得往生を願われるならばそれもよろしかろう。一切衆生のなかには、天皇家も国家もすべてふくまれておりますからな」

守覚はつづけて、

「女院もごそんじのように父君は法然房を何度か御所に招いて、その法門を聴問しておられます。また御房はあみだ仏にすごることを説きますが、父君が深く信仰された熊野権現、あれは垂迹すいじやくしたあみだ仏を祭っております」

ここで垂迹とは、本仏が権かりに神の姿をとって現れる、とする信仰で、熊野神社はあみだ仏の垂迹とされていた。

そしてこの垂迹したみだ仏への信仰は、特に平安後期以後さかになり、後白河法皇は

何と三十四回、後鳥羽上皇も三十回、熊野もうでをしている。

守覚はふたたび咳ばらいをすると、

「もちろん、法然房に聴問されたからといって、父君は浄土門に帰依されたわけではありません。天台・真言の別なく、広く仏道そのものに帰依され、その一つに法然房の教えも聴問されたわけです」

夕ぐれが近づき、女房が一人、火をおこした炭櫃すげつ（火鉢）をはこんできた。

それを眺めていた守覚は、女房が一礼して去ると、

「しかし齋院が、結局、浄土門にも帰依できなかったとなると、それはやはり、この法門が齋院にはあわないということでしょう。わたくしが申し上げたいのはこのことです。真言の道は広い。齋院が帰依されるのは、この道しかありません。これを申し上げるために、今日はこうして女院ともども、お邸にまいましたぞ」

（つづく）

ポケット版

枕経通夜葬儀諸経偈文集

諸経偈集

こんな経本が
ほしかった

能化必携！

21世紀の経本遂に刊行！

プロが創った

プロフェッショナルのための経本

緊急、不意の枕経に、お通夜に

能化のお通夜、葬儀のお焼香に

これさえあれば

出先からそのまま回れる。

3つのポイント

◆ポケット版という大きさ！

タテ15センチ、ヨコ8センチ、

厚さ1センチ

◆通夜、葬儀に必要な経文を、

最小限にすべて網羅！

◆経典は、すべて本字にて表記！

内容

廣懺悔

懺悔偈

初夜禮讃偈

佛說無量壽經歎佛頌

佛說無量壽經四誓偈

佛說觀無量壽經真身觀文

回向文

佛說阿彌陀經

一枚起請文

一紙小消息

發願文

脇導師作法

廣懺悔訓誡

定価：2,000円(税込)

送料 1冊	180円
2冊	210円
3～5冊	310円
6～8冊	340円
9～11冊	380円



◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 〈戒法寺内〉

TEL：03-3441-8971 FAX：03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

今月の表紙
明美紅蓮

蓮

LOTUS

10月

池の中に蓮華あり
大如車輪
青色には青光あり
黄色には黄光
赤色赤光
そして白色には白光ありて
微妙香潔なり
舍利弗よ
極楽国土には
かくの如くの
功德莊嚴が成就される

蓮華

この不可思議

たとえ七寶池八功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

れんこん(蓮根)

れんこんは蓮の地下茎です。漢字で「蓮根」と書くので根と思われがちですが、植物学的には茎です。本来の根は髭根とよばれ節から生えています。種れんこんは成長して節をつくりながら延びていきます。この節から葉芽や花芽が出ます。れんこんには通常8~10の穴があいています。この穴は葉茎、花茎にもあいていて、葉の中盤(へそ)に通じていて外と内のガス交換をおこなっています。「延喜式」(929)に、正月の法会にれんこん料理がでていましたので、古くから食べられていました。これから冬にかけて、れんこんの美味しい季節になります。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文華史」(カド創房)などがある。

P.49の答①かこのとって②巨大キノコの水玉③顔キノコの柄④お魚の図鑑の表紙絵⑤ウサギの耳⑥切り株の左はしの根⑦十文字キノコの位置

御法語に聞く

善人なお尚い以て往生す、況いや悪人をや。

善人ですら往生が叶うのであるから、まして悪人はなおさ
らのことである。

罪人なお猶生まる。況や善人をや。

【一紙小消息】

重い罪を犯してしまった人でも阿弥陀さまに救いを求めれば往生は叶う。常にわが身を振り返りつつお念仏を称え、罪を犯さないように心がけている人が往生できないことなどあろうか。

善人と悪人とく阿弥陀さまのねがい

【三心料簡および御法語】

十月、今月号が届くころには、全国各地でお十夜法要が営まれ、多くの参詣人で賑わっていることでしょう。春の御忌法要にも、夏の施餓鬼法要にも、阿弥陀さまやご先祖さまに感謝のまことを捧げ、わが身の弱さを自覚しつつも精一杯努力して日々の生活を送り、浄土往生が叶うようにとお念仏を称える方々で所狭しと各寺院の本堂は埋め尽くされます。そして、そうした光景を阿弥陀さまやご先祖さま方も心から喜んでご覧になって下さることでしょう。

善人尚以て往生す、況や悪人をや。

『歎異抄』 発見以来、親鸞聖人の専売特許のようにいわれる悪人正機。けれども、そうした考え方は親鸞聖人が全幅の信頼を寄せられた師、法然上人から受け継いだ教えであり、法然上人もお示です。このご法語の善人とは人間が弱く愚かな存在であることに無自覚で自力の心の残る者を、悪人とはいかなる仏道修行も叶わずに輪廻を繰り返し、今なお煩惱に覆われて生きるしかない私という弱く、愚かな人間存存を深く自覚した者を指しています。

法然上人は、阿弥陀さまの化身として崇め、ただ一師に偏依された善導大師の深い内省をして「自信は是煩惱具足せる凡夫なりとの給えり（かの善導大師でさえ『自分こそ煩惱にまみれた愚かな人間である』とおっしゃっている。『一紙小消息』』とお示しです。いたい誰が「私は違う！」と言いきることなどできましようか。

「悪人」お念仏を称えて阿弥陀さまにお救いいただく以外に道のない私たち自身の深い内省から生じてくる自覚です。

罪人猶生まる、況や善人をや。

その一方で法然上人は、こうした趣旨のご法語を多くお示しです。そして、ともすると悪人正機を親鸞聖人の専売特許としたがる方々から「不徹底だ！半自力半他力だ！」などと批判が加えられました。けれども、はたしてそうした批判はあたっているのでしょうか。このご法語の罪人とは文字通り罪を犯した者であり、善人とは弱く、愚かなわが身であることを自覚しつつも、罪を犯さないようにと心がけ、お念仏を称えつつ日々の生活を精一杯送る者を指しています。

法然上人は、阿弥陀さまのみ心を汲み取られ「たとへば父母の慈悲は、善き子をも、悪しき子をも育めども、善き子をば悦び、悪しき子をば歎くがごとし。仏は一切衆生を哀れみて、善きをも、悲しきをも渡し給へども、善人を見ては悦び、悪人を見ては悲しみ給へる也（『念仏往生義』）」とお示しです。私たちは、阿弥陀さまのこうした優しく慈しみ深いみ心を感じたならば、弱く愚かなわが身であることを自覚しつつも、そのみ心を悲しませないように「少罪をも犯さじと思うべし」との日暮らしを自ずと心がけることとなるのです。そして、それこそ阿弥陀さまの願いに通じるものなのです。

「善人」この私をお救い下さる阿弥陀さまのみ心を悲しませず、その願いに順じたいとの深い内省から現出してくる姿です。

私は、各寺院の本堂を埋め尽くす人々を喜んでご覧いただいている阿弥陀さまの願いを伝えようと、この二つのご法語を自在に使い分けられた法然上人の深い洞察にこそ、悪人正機の真の意義を見いだすことができるのです。

（大正大学講師 林田康順）

東海道 五十三次を 歩いて (六)

最終回

原田 功

老いてなお
童の気持ちを持った仲間
四人で東海道を
歩きだした

8、完歩（京・三条大橋で）

私たちは遂に終点の京・三条大橋にたどり着いた。平成11年6月2日、午後2時11分であつた。

山科から電車も車も通る広い三条通りを西へ向かつて歩く。三条大橋は近いはずなのになかなか見えない。バスや大型車に遮られて見えないのだ。車の行き交う道の向こう側に高山彦九郎の銅像が見えて、「ああ、三条大橋だ。」と、やっと確信することができた。

やがて、待望の三条大橋は道幅より狭く平べったい姿を現わした。

「やつとたどり着いた。」という感動に私たちは浸っているのだが、道行く人々には我々の「生涯の大事業」に賛辞をくれる人は一人もなく無関心に通り過ぎて行く。当たり前的事だが、私たちは自己中心的に、誰かれとなく「東海道をたつた今歩き通したんですよ。」と訴えたかった。

Kさんがふざけて

「おれが、橋のたもとでバターッと倒れるか。」

と言う。

「マラソン選手がゴールで倒れるようにね。」

「欄干に掴まってそのままへなへなと倒れてみなよ。」

「みんな本当にするよ。」

4人は他愛もなく大声をあげながら笑い合っていた。

せいぜいこのくらいが私たちのささやかなパフォーマンスであつた。

用意してあつたポスターを広げて記念写真を撮る。

ポスターには「東海道五十三次完歩バンザイ!!」（次頁）と書いてある。

道行く人々は、私たちのパフォーマンスをすぐに了解して、ニコニコと微笑して通りすぎる。この写真に、今道を通る人に誰でも入

板下 土山 水口 石部 草津 大津 三条大橋

日本橋 品川 川崎 神奈川 保土ヶ谷

戸塚

関

藤沢

亀山

平塚

庄野

大磯

石巻師

小田原

四日市

箱根

桑名

三島

宮

沼津

鳴海

原

知立

吉原

岡崎

蒲原

藤川

由比

赤坂

興津

御油

江尻

吉田 二川 白須賀 新居 舞坂 浜松 見付 袋井 掛川 日坂 金谷 島田 藤枝 岡部 丸子

府中

完 歩

平成11年6月2日

東海道五十三次 492.1キロ

高木悦男
岸 正明
島田泰介
原田 功

バンザイ!!

ってほしかった。
三条河原を散歩してきた二人の若い娘さん
に、
「これ持って入ってください。」
とお願いと、どきまぎしていたがすぐに
理解して快く入ってくれた。素直で賢そうな
娘さんたちだった。
「東京の日本橋から歩いてきたんですよ。」
という、
「えー。全部歩いたんですかー。」
と、驚いてくれる。
「それじゃー、私四日市ですけど、四日市も
歩いてきたんですかー。」
「もちろん、四日市では駅の近くのホテルに
泊まりましたよ。」
と胸をはる。
写真送りますからと、住所を教えてもらっ
て別れた。
これも何かの縁。見ず知らずの娘さんたち
だが、彼女たちに幸せありと祈りながら三条

大橋を後にする。

後日、約束どおり写真を送った。走り書きの簡単な手紙をそえて。

すると、何倍も丁寧な返事が二人から返ってきた。

Mさんから

前略

先日は、ご丁寧なお手紙と写真を送って頂いて、どうもありがとうございました。とても嬉しかったです。

でも、皆さんほんとにお元気ですね。日本橋から歩かれたなんて……

本当に驚いてしまいました。

そして、お手紙を読んでもう一つびっくりしました。あの乙武さんの先生方だったなんて……

実は私、あの本持っています。本の中で度々出てくる先生方の工夫や努力、生徒に対する愛情や優しさがとても印象に残りました。

彼、乙武くんも立派に自分の人生を歩んでおられてすごいなあと思いました。

きっと、彼自身の努力と先生方のすばらしい教育があったからこそですね。

あの時私と一緒にいた彼女もとても喜んでいました。

紹介が送れましたが、私は21才で今はアルバイトをしています。公務員になる為に勉強をしています。そして彼女も学生でアルバイト先で知合いました。

まだ勉強を始めて間もないのですが最近公務員の試験も難関だと聞くので一生懸命頑張ろうと思っています。

つたない文章で申し訳無いですけど、ありがとうございます。

また京都にご旅行の際にはお電話を下さい。京都名所をご案内しますね。

では健康にはお気をつけて……

皆さんによりしくお伝えくださいませ。

さようなら



Hさんより――

前略

初めまして。私は写真の左側に写っている
○○○○と申します。この度わざわざ写真を
送って下さって、どうもありがとうございます。
した。

私たちにとても良い思い出の一枚となりました。

東海道五十三次を歩いてこられたということ
で私たちは大変びっくりしました。一体どれ
だけの時間がかかったのでしょうか。それは
とても長い時間だったと思いますが素晴らし
い思い出となったことと思います。

ところで、私は京都で同志社大学に通って
います。文学部英文科でゼミはシェイクスピア
文学を研究しています。原田さんたちは小
学校の先生だったんですね。「五体不満足」は
まだ読んでいませんが是非読んでみたい本の
一つです。それに登場している担任の先生と
教頭先生とお会いできてとても光栄です。

いつかまた京都に来る機会があればぜひお知
らせ下さい。

乱筆・乱文お許しください。それではさよう
なら、お元気で。

加茂川の水はきれいだった。20年ほど前に
この三条大橋に来たことがあるが、その時は
水は汚れていた。その時の印象と今度は全く
違う。

水がきれいだということは、こんなにも景
観を美しくし人に安らぎを与えてくれるもの
か。人も多く、車も相変わらず多いが、加茂
川の流れは清らかで、橋を通る人々もゆった
りと落ち着きがある。近くに流れる有名な高
瀬川も以前はどぶ川のようにだった。今は底に
石が敷かれてきれいな水が流れている。観光
都市京都市当局の施策もあったのだろうが、
京都に住む人々の努力があつてこそこんな
きれいになったのだろう。

住み良い都市というのは、水の浄化という

ことが必須の条件である事を強く意識した。
「京都は進んでいる。21世紀の都市の姿に向かっている。」と思った。

東京は遅れた。日本橋のあの姿は何だ。橋の上に高速道路が横たわっていて空が無い。日本橋川の流れは見るに耐えない黒い水である。それにひきかえ、三条大橋には広い空がある。河原がある。陽の光がさんさんとふり注ぐ。人々は河原に降りて散歩している。

あのような素直で優しい娘さんたちとの束の間のふれあいも、この川の美しさと重なって、私の心に京都の美しさを増幅した。

日本の国の大きな川も小さな川も人に関わり、幾多の歴史を刻んできた事を私たちはこの旅を通して知った。そして、人々は長い間川と戦ってきた事を実地に学ぶ事もできた。

しかし人は川を征服した時、人自身と社会を荒廃と滅亡に追い込んでいることも如実に知らされた。

川は人を育てる。美しい川のある都市に、

信頼感で結ばれた
人間社会を形成する事。今人々は21世紀を目前にしてその方向に向かって営みを始めている。20世紀に生き、その社会での役割をほぼ終わった私たちであるが、この事をしっかりと見届けてから人生を終わりたいものだと思った。

9、旅を終わって

私たちの東海道歩きは2年と3カ月もかかった。その間、実質歩いた



のは24日である。休み休みながらの東海道歩きであった。

台風が来て途中から引き返した事もあった。今回は同じ所まで行つてそこから歩きだした。この2年3カ月の間にメンバーの一人が交通事故に遭つて入院というアクシデントがあり、また次の年他の一人が庭仕事中に足の骨を折つて入院ということもあった。しかし私たちはみんなが体が万全の時を見計らつて歩いた。長い時間がかかったが、揃つて完歩できたことは幸せだった。

松尾芭蕉は「東海道の一筋を知らぬ人、風雅におぼつかなし」という言葉を残している。東海道を旅したことのない人は風雅（俳諧）を語る資格がない、という事らしい。芭蕉の言う「風雅」とは俳諧の事であるが、この風雅を知るといふ事は「人生とは何か」「世の中とは何か」を知る事でもあらうと勝手に解釈している。

齢60を半ばも過ぎた私たち4人は、初めは何か変わったことをやろうというような軽い気持ちで東海道を歩き始めたのだった。しかし、歩く毎に自分の足でテクテクと歩く旅の素晴らしさを実感し、自分が生きてここにある事の幸せをかみしめながら歩くようになった。

芭蕉の境地までは及びもつかないが、少し高い山に登つて、これまで歩んできた道を振り返り、社会や人生の事が少し解つたような気がしている。

それは、点ではなく、線をたどりながら、自分が生活している国土の地理と歴史をライブに見ることができたからである。

今私たちは、東海道五十三次を歩き通すという生涯の記念塔を打ち建てた事に何よりもこの上ない喜びを感じている。

東海道五十三次完歩の記録

江戸・日本橋より京・三条大橋まで492.1K

——歩いた人——

高木悦男／島田泰介／原田 功／岸 正明

(71歳)

(70歳)

(67歳)

(66歳)

1997・2・20	日本橋 品川 川崎	17.6K	(日帰り)
3・8	川崎 神奈川 保土ヶ谷 戸塚	23.4	(日帰り)
3・30	戸塚 藤沢 平塚 大磯	24.4	(日帰り)
4・9	大磯 小田原 (湯本)	23.0	(日帰り)
4・20	(湯本) 箱根 三島	23.8	(日帰り)
5・4	三島 沼津 原	11.7	(日帰り)
6・1	原 吉原 蒲原	22.8	由比泊
2	蒲原 由比 興津 江尻	17.1	
6・26	江尻 府中 丸子 岡部	23.9	岡部泊
27	岡部 藤枝 島田 金谷 (菊川)	22.2	菊川泊
	悪天候のため菊川より帰る		
10・19	(菊川) 日坂 掛川 袋井	19.5	袋井泊
20	袋井 見付 浜松	22.2	浜松泊
21	浜松 舞坂 新居	16.7	
11・24	新居 白須賀 二川 吉田	18.3	吉田泊
25	吉田 御油 赤坂 藤川 (美合)	20.7	桑谷泊
26	(美合)	悪天候のため美合より帰る	
1998・3・22	(美合) 岡崎 知立 (富士松)	21.5	知立泊
23	(富士松) 知立 鳴海 宮 桑名	20.0	四日市泊
24	桑名 四日市 石薬師 庄野	25.9	庄野泊
25	庄野 亀山 関	13.6	
1999・5・30	関 坂下 土山	16.2	土山泊
31	土山 水口 (三雲)	16.5	三雲泊
6・1	(三雲) 石部 草津 (瀬田)	約12.0	瀬田泊
2	(瀬田) 大津 三条大橋 嵐山	約12.0	嵐山泊
3	嵐山 嵯峨野		

実働日数 25日 泊数 14泊

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

癒しのCD

投稿

古楽器を使ったオーケストラと
男女の混声合唱による現代音楽



アルボ・ペルト
『MISERERE』
(ミゼレーレ)

ECMI430 847539-2

三年前の夏、インドへ行った。タイのバン
コック経由でカルカッタに入った。前夜、バ
ンコックの屋台で「明日からは毎日カレーだ
から」と屋台で麺やら魚やら蟹やらを貪り喰
いビールをガブ飲みした。

カルカッタの街はすさまじかった。千二百
万人が暮らす大都市なのに、稼働している信
号機は一台しかなかった。そこをタクシーや
りリキシャや牛車やオートバイやら自転車、
そして人々が、濁流のように流れる。

路上で煮炊きをして暮らす人々、旅行者と
見るや金をせびりにくる子供を抱いた女たち。
女たちが抱いている子は目が潰れてたり、ひ
どい皮膚病だったり、肘から先が無かったり
した。街灯の無い巨大な街の中、人々が蠢き
ひしめいていた。

毎朝バスに乗りガンジス川のガート（沐浴
場）まで出かけた。雨期のガンジスは増水し
200メートル程もある川幅を泥水がゴウゴ
ウと流れる。人々はその川に入り沐浴し、そ
の泥水を口に含み木の枝で歯を磨く。ガート
脇の広場でインドレスリングの選手たちが遅
しい身体にオイルと砂をすり込み、息を荒ら
げ組み合っている。

その時だ、音楽が聴こえた。ガンジスに架
かる巨大なハウラー橋、その上を通過する車
の群れ、そして人々。その重低音が響き渡
り、男女の混声合唱が天に向かい吠える。あ
の音がもう一度聴きたくて、このCDを聴く。
今年またインドに行く。

（山本勝之）

心の音楽

投稿

ブラジルは音楽を生みつづける
そのなかで、ひとときを輝く存在



カエターノ・ヴェローゾ

『リーヴロ』

マーキュリー・ミュージック・エンタテインメント
PHCA-1057

一九六〇年代半ばから、ブラジルのポピュラー音楽界で常に先端を歩んできたシンガー・ソング・ライター、カエターノ・ヴェローゾ。デビュー当時には英米のサイケデリック、ムーヴメントの影響を色濃く受け、長髪に厚化粧の出で立ちで前衛的なサウンドを聴衆に披露していた彼も今や五七歳。ロメオ・ジリのスーツが似合うロマンスグレーの伊達男だ。年季は彼の柔らかい声に艶を加え、ギターの調べをよりなめらかなにしたけれども、

聴き手をドキドキさせるような毒気と鋭さには手を触れず、相変わらず正体の分からぬ薬味がおつゆの中からピリリと効いてくる。

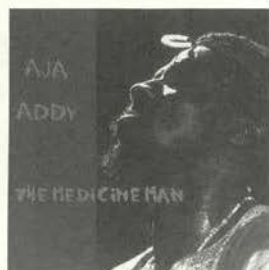
一昨年にリリースした『リーヴロ(本)』は、老いてますます盛んな彼が到達したひとつの境地だ。親しみやすいメロディを穏やかに歌う彼の背後で、チェロ奏者でバンドマスターのジャキス・モレレンバウム(坂本龍一などとも共演している人)以下、ブラジルならではの多彩な打楽器群が豊かなリズムを刻み、ホーンや弦楽器がさらなる彩りを添える。要素のそれぞれをあらためれば新しいものは何もない。しかし、混濁を極めた末に現れる上澄みのような透明感が、舌の真ん中だけを通り抜ける日本酒のように旨い。もちろん、大きなポリウムで聴けばビートのうねりに腰が動き出してしまうことは必定だが、小さい音では歌の生の美しさにしみじみ酔える喜びがある。一枚で二度美味しい、二〇世紀が生んだ宝石。

(山下泰司)

心の音楽

投稿

音楽と祝祭空間の幸福なる合体。
我々、西洋近代が失ったもの。



アジャ・アティ 『メディシン・マン』

Welt Wunder Records
No. 109-2

西アフリカ、ガーナの太鼓の演奏です。メロディはありません。大小の太鼓、鉦が打ち出すリズムだけです。そのリズムは様々ですが、どれもアップテンポな力強いものです。聞いているうちに、身体がしだいにやさしく揺れてきます。にもかかわらず、気分が澄んで落ちついてくるのが不思議です。アフリカから遠く離れた東洋人の私たちが、懐かしい気分になるのはどうしてでしょうか。

それはひとえに「ティガリ」という精霊の

力です。演奏者のアジャ・アティさんは、ただのドラム奏者ではありません。ドラムを奏でることによって、「ティガリ」を呼び出し、その力を借りて、人々の悩み事を解決したり、病をいやします。また、結婚式のような祝いの場や、新しい命の誕生、あるいは臨終に立ち会うこともあるそうです。彼は祈禱師であり、医師であり、ダンスも教える、人々の精神的指導者なのです。

本来、人生というものはいたって単純なものです。人間はしばしば悪霊のもたらす悪い考えにとりつかれて、人生を必要以上に複雑にしていまい、胃を病んだり、肝臓を痛めたり、あげくに心をわずらったりします。そうしたもろもろの病気を癒し、平明でおだやかな人生を回復してくれるのがティガリなのです。そのティガリの精霊がこのCDには封印されているというわけです。こういった異郷のものも一度ぐらい試してみる余裕も必要かもしれません。

(長谷川 祐一)

癒しのCD

投稿

心が洗われる聖歌。
浄土宗の音楽法要。



浄土宗
『仏教聖歌』

ISSUED BY JODOSHU JAPAN
JSP-9802

音楽法要の導入助奏楽。映画音楽を思わせる美しい旋律が流れる。そして浄土宗宗歌である「月かげ」。法然上人の御歌に曲をつけた、この「月かげ」はもはや浄土宗の文化遺産ともいえるほどの歳月を経て愛され歌われてきた。大正大学の混声合唱団は、単一大学のコーラスとしてはなかなかの実力がある。編曲もよくできていてハーモニーは流麗。続く「衆会」「ささぐみあかし(いまささぐ)」も充分に聴かせる。ひとりの夜、就寝前

にでも聴いたら心が安まるような構成になっている。そういう聴き方ももちろんいいが、たとえば法要の始まる前、あるいは法話の始まる前に本堂に流しておくようにも作られている。切り離された法要としてではなく、また単なるBGMとしてでもなくこの中の幾つかを檀信徒とともに歌うことも試せるだろう。歌詞だけを（もちろん譜面付きならもっといいが）コピーして配って置いて、一緒に歌えば、とてもよい教化のひとつになるだろう。ピアノやオルガンを備えていない寺院でもこのCDを掛け、ひとりで簡単に歌唱指導をすることができ。最後のところにBGMとして伴奏のみで四曲入っているから、それをカラオケとして用いることもできる。

もしはじめて聴く檀信徒がいたら、ほんとうに驚くであろう。仏教にもこういう側面があったのか、グレゴリオ聖歌にも似て荘重で心が洗われるようだ、と

浄土誌上句会

●施餓鬼

〈特選〉
海山の木霊ひきよせ施餓鬼寺

河合富美江

●「木霊」は一つは木の精霊、もう一つはやまびこだが、この句は、縁者のない仏の霊として借りたものだろう。いまこの霊たちが帰ってきて、供養を待っている堂内にひしめいているのである。

〈佳作〉施餓鬼壇ささげし供華の匂ひ立つ

大場 清

盃空けて私ひとりの施餓鬼とす

横山 正志

読経済み団扇せはしき施餓鬼寺

中村 善也

●葡萄

〈特選〉
一房の意外に重し葡萄摘む

提 ふみ子

●ぶどう狩りだろう。よく色づいた一房を選つて切りとる。その時、思いもなかった重さが手に加わる。房の重さは、うまさや約束

しているようである。

〈佳作〉はりつめて葡萄苦しくないかしら

四本 章江

紙に透く葡萄一房賜りぬ

増田 信子

ぶだう棚木洩れ日ゆれて青き粒

中村 陽子

自由題

〈特選〉
駅売りの傘ばかり増え夏おはる

齊藤 亮吉

●夕立というのがある。その他、勤めの帰りなどに降られることが多かったのだろう。気がついてみると、駅から家までのために買った傘が、いくつにもなっている。この夏はよく降られたと思う。

〈佳作〉翌朝も雨が尾を曳き鬼芒

湯上 善城

夏帽子目深にかぶり奉仕の日

西井 正

大伽藍庇借りれば風涼し

小林 恵美

●施餓鬼

手作りの精進料理施餓鬼寺

我が影に添ふ水明りや川施餓鬼

施餓鬼寺風通るたび木の匂ふ

ご供養のつづく施餓鬼会僧走る

氷菓子ふたつ供へし施餓鬼棚

句ふ庫裡揃ふ顔あり施餓鬼会

堂開け放ち施餓鬼会の仏にも風供す

杖ついて施餓鬼寺まで父母恋しつ

施餓鬼棚ほうずき提灯茄子の馬

施餓鬼会や夫に逝かれて知りたもう

●葡萄

甲州路右に左に葡萄棚

葡萄籠に溢るる彩をまぶしめり

細田初枝

河合富美江

増田信子

大場清

中村陽子

青木伊都子

山本美代子

太田仁

中島一子

折茂とめ乃

細田初枝

河合富美江

飲み口をワインと洒落て葡萄吸ふ

一房の青き葡萄や孫十色

リストラの子のもどり鯉ぐ葡萄園

不揃ひに粒実りたる葡萄かな

葡萄もぐ手の輝いて真昼かな

ラッシュ時に見上げる葡萄狩りポスター

宅配の葡萄の届きそうな午後

●自由題

蟬時雨大樹激しく揺すりけり

秋燕包丁凛と研ぎあがり

蟬時雨戦友の碑の鎮魂歌

消えてのち耳かたむける遠火花

万緑に地蔵の赤き涎掛け

恙なくこんにちありて盆支度

そよぎゐる稲穂の彼方沖明り

かなかなや顎髭ぬくき檻の中

寺の庭苔に降りつく装羅の花

投手戦ベンチの葉罐汗かいて

夏料理忘れし虫歯疼きだす

膝折して汗しずめをり阿弥陀の前

日焼けして皓齒際立つ島の子ら

大場清

山本美代子

折茂とめ乃

瀬川浩子

橋本蘭子

駒井祐子

富田良子

細田初枝

河合富美江

山本美代子

太田仁

中島一子

折茂とめ乃

池田伊織

増田信子

別役玲子

小久保あきさ

中村よみ子

藺田郁子

島谷ときを

第十回
浄土誌上句会の
お知らせ

季節

柚味噌

破芭蕉

自由題

締切・十月二十日

発表・『浄土』十二月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

☆まちがいは7ヶ所あります。

「キノコ狩り図鑑があっても役立たず」



イラスト 藤井ひろし



まちがいがいさがし

答えは27ページにあります。

編集後記

古代へと心遊ばす秋の午後 岱潤

人は何故死者に花を捧げるのであろうか。そしてそれは何時ごろから行われてきたことなのであろうか。

もう二十年以上も前、ある老僧からこんな話を聞いたことがある。「花を仏様にあげているのは、花で仏様を飾っているんじゃないよ、花を見たときに感じる我々の心をあげているんだよ。だから仏様にあげる花はみんな咲いている花をこちら側に向け、裏は茎と葉ばかりじゃないか」

この説にそのとき大変感激して、以来三具足の説明のときなどには、必ず話させてもらってきた。これはこれで

いいとは思いますが、純粹に美しいものを死者に捧げる心を心として理解してもいいだろう。そしてこのことは以前四万五千年から六万年前のネアンデルタール人から行われていたことが立証されていたが、最近ではそれよりも古く百万年前ごろのベキン原人の墓から花の花粉が見つかり、その当時からすでに人類は死者に花を捧げて来たことが想像されている。

原人と言われる人間の子孫たちも、花を愛し死者を供養する心を持っていた。文明の進化は同様に人間の進化を生んでいるか考えさせられる。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土

六十五巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷—平成十一年九月二十五日

発行—平成十一年十月一日

発行人

真野龍海

編集人

宮林昭彦

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話〇三三・五七八・六九四七

FAX〇三三・五七八・七〇三六

振替〇〇一八〇八・八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者通行禁止



火気厳禁



止まれ



落物注意



落物注意、静かに



落物注意

住友海上

代理店



落物注意



落物注意



落物注意

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



落物注意



落物注意



落物注意



落物注意



落物注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

浄土特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人鑽仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠



水晶腕念珠

水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

水晶数珠 ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

プレスレッド ④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

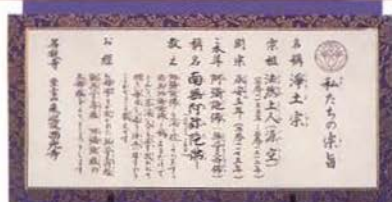
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円

⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円



水晶数珠プレスレッド

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えます。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。



仏壇用宗旨布教額

家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

